

## 安倍政権の言い換え体質

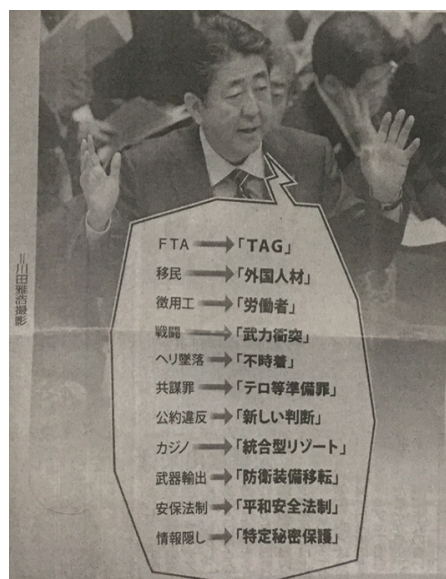
標題は毎日新聞 11 月 28 日夕刊「特集ワイド」。リードから「物は言いよう」は、時と場合によっては人間関係の「潤滑油」になり得る。だが、政治は別ではないか。安倍晋三内閣では、集団的自衛権の行使を容認する安全保障法制を「平和安全法制」、南スーダンでの戦闘を「武力衝突」、消費増税の延期を「新しい判断」と言い換えた。今も、ある。言い換えを見逃していいのか。

上西充子法政大教授(労働問題)は「安倍政権は、過労死が懸念される法改正を『働き方改革』や『高度プロフェッショナル』と言い換えたのと同様、触れられたくない中身には触れず、論点をずらしたり、はぐらかしたりして野党の追及をかわしてきました」と指摘する。徴用工を労働者と言い換えることについても「厚顔無恥話法による印象操作の一種ではないでしょうか」と批判する。

これらの「言い換え」(写真)について、精神科医の斎藤環筑波大教授は「政治は言葉が命。不誠実な言い換えは許されません」と断じる。ところが、内閣支持率は意外に底堅い。毎日新聞が 17、18 日に実施した全国世論調査では、9 カ月ぶりに支持率(41%)が不支持率(38%)を上回った。

支持率が下がらない理由を、斎藤教授は「政治家の誠実さよりも経済が大事だと思っ  
て現状維持を望むヤンキー的価値観に支えられている」と分析する。政権の説明に納得  
していなくても、うそに慣れてしまい、目の前にある課題は「気合でなんとかなる」と  
考える文化に支えられているというのだ。

写真下は護衛艦いずも(中日新聞 11 月 28 日)。これも「言い換え」が画策されている。朝日新聞 12 月 6 日朝刊リードから「政府が年末に改定する「防衛計画の大綱(防衛大綱)」に関する与党のワーキングチーム(WT)は 5 日の会合で、海上自衛隊の「いずも型」護衛艦を改修する事実上の「空母」について、「多用途運用護衛艦」と呼ぶことで一致した。今後、この呼称を使う方向で政府、与党内で調整する。憲法上、「攻撃型空母」は保有できないとされていることから、批判をかわすのが狙いだ。



(2018 年 12 月 13 日)